

1) 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2) 研究会基本情報

タイトル：「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」
(令和元年度第2回研究会)

日時：令和元年2月16日(土曜日)午後13時30分より午後17時

場所：AA研302室

報告者名(所属)：

1. 仲尾周一郎(AA研共同研究員, 大阪大学)

「クレオールを超えて：ナイロビ・キベラにおけるヌビ語・スワヒリ語・シェン」

2. 全員

「マインツワークショップ報告および最終年度の方針についての討議」

【概要】

2019年度第2回研究会は、1件の発表および全員での討論で構成された。研究発表の概要については、発表者による以下の報告を参照されたい。全体会議においては、11月29日から12月1日(pre-workshopを含む)にドイツ・マインツ大学で行われた国際ワークショップ“Sociolinguistic perspectives on variation in Swahili –new approaches to the study of language and its social context in East Africa”の報告が行われた。同ワークショップには本プロジェクトの日本側メンバー6名、海外メンバー2名(主催者のNico Nassenstein氏、およびSOASからChege Githiora氏)が参加し、スワヒリ語諸変種に関する主に社会言語学的アプローチによる研究成果が報告され、活発な議論が展開された。とりわけ(いわゆるlinguistics in tourism的な研究に見られるような)言語をある種の社会的資源として捉えるアプローチについては、これまで日本での研究展開がほとんどみられてこなかっただけに、本プロジェクトとしても今後の動向を注目していきたい。また、本プロジェクトで着実に強化されてきた海外のスワヒリ語研究/アフリカ社会言語学コミュニティとの研究交流を維持・発展させながら新たなプロジェクトを構築していくための見とおしについても自由な議論が行われ、実り多き研究会となった。

(文責：品川大輔)

【発表概要】

「クレオールを超えて：ナイロビ・キベラにおけるヌビ語・スワヒリ語・シェン」

Beyond creolization: Nubi, Swahili, and Sheng in Kibera, Nairobi

仲尾周一郎

ナイロビ・キベラ (Kibera) には、2種類以上の有名な接触言語、ヌビ語 (Nubi) およびシェン (Sheng)—これにローカルなスワヒリ語変種である「ナイロビ・スワヒリ語」を加えることもできるだろう (cf. 品川 2009)—が存在しているが、これまでこれらの言語相互の接触に着目した研究は行われてこなかった。

ヌビ語は、19世紀末のムハンマド＝アリー朝期の南スーダンに出自をもち、植民地期初期には王立アフリカ・ライフル隊 (King's African Rifles) として東アフリカ各地に配備され、現在は東アフリカ諸都市に住むヌビ人 (Nubi/Nubian) と称される集団によって話される、アラビア語基盤の「クレオール」として広く知られてきた。ヌビ語は、その姉妹言語であり、南スーダン南部で共通語として話されるアラビア語クレオール、ジュバ・アラビア語 (Juba Arabic) と比して、スワヒリ語の影響が大きいことが指摘されている (Luffin 2014)。キベラはケニア最大のヌビ人集住地であり、ヌビ人はキベラの最古層の住民である。

一方、シェンは、その定義は研究者や話者によって差があるが、ケニア (特にナイロビなどの都市部) で行われる、スラング語彙 (民族語からの借用を含む) やコードスイッチングなどの言語実践、あるいはそれらによって特徴づけられる簡略化・再分析された非規範的スワヒリ語変種を指す (本研究ではこのスワヒリ語変種からスラングやコードスイッチングを排したものを、理論上「ナイロビ・スワヒリ語」と呼んでおく)。シェンの話者はキベラをある種の発祥地と捉え、“motherland” と呼ぶことがある (Githiora 2018)。

本研究では、2019年にナイロビ・キベラにて行ったフィールドワークの成果に基づき、ヌビ語におけるスワヒリ語の影響 (主として翻訳借用・文法借用) および「ヌビ人のシェン」と呼ばれる言語実践 (ヌビ語・スワヒリ語・英語を含むコードスイッチング) の分析をもとに、ナイロビにおける多言語状況の発展について議論した。この結果、ジュバ・アラビア語 (Nakao 2017) と比較した際、ヌビ語は単純借用以外にも極めて多くの点 (語彙構造・文法構造) にスワヒリ語の影響が見られるなど、「アラビア語クレオール」以上の複雑な状況にあること、かつ標準スワヒリ語と比較した際、ナイロビ・スワヒリ語にはヌビ語と共通する語彙的・文法的特徴が見られることが明らかとなった。これらの帰結は、王立アフリカ・ライフル隊 (スワヒリ語を軍隊語とした) や東アフリカ都市最古層の住民としてのヌビ人の過去を考えたとき、実際には驚くには値しないものである。

ただし、キベラで話されるこれらの言語は全て、(それぞれ個別の「言語」としてのアイデンティティは保たれてはいるが) 相互に極めて混淆的・流動的であり、こうした諸特徴がどの「言語」からどの「言語」へ影響したものかと問うことは、あくまで伝統的な構造主義的理論に則っているに過ぎず、眼前の実態を直視しない机上の議論とならざるを得ない、という限界がある。こうした限界を乗り越えるためのポスト構造主義言語学的な理論的枠組みは、本研究プロジェクトのドイツ側メンバーらによって構築されつつあり、今後も学術的交流を継続していくことで研究の進展が期待される。

Githiora, Chege. 2018. *Sheng: Rise of a Kenyan Swahili Vernacular*. Suffolk: James Currey.

Luffin, Xavier. 2014. "The influence of Swahili on Kinubi", *Journal of Pidgin and Creole Languages* 29 (2): 299-318.

Nakao, Shuichiro. 2017. A Grammar of Juba Arabic. Doctoral thesis, Kyoto University.

品川大輔. 2009. 「言語的多様性とアイデンティティ、エスニシティ、そしてナショナル
リティーケニアの言語動態」梶茂樹・砂野幸稔(編)『アフリカのことばと社会—
多言語状況を生きるということ』東京: 三元社. pp. 309-348.